

2021 年 5 月 26 日

帝京大学空手道部における、空手指導・学生指導改善書

私、香川政夫は、今後の本学空手道部における指導に関しまして、「空手道部の調査に関する調査報告書」の「学生スポーツとしての空手指導のありかたに関する考察」を受け入れ、部員からの意見も参考にし、下記の通り指導改善に努めます。

記

今後の練習において、竹刀を用いた練習は行わない。仮に新しく道具を用いた練習を考える場合は、例え練習メニュー自体のリスクが低いと考える場合であっても、その指導者と、稽古を受ける選手側の熟練度等により、リスクが上昇することも念頭に置き、安全チェックを慎重に行い実施する。

練習で怪我などが発生した場合、怪我の重い軽いに拘わらず、実施した練習メニューのリスクの検証を行う。空手の稽古は、他のスポーツと比べ、怪我の発生頻度が高いと考えられるが、今後はその全てについて報告を受け、安全性の検証に活かし、是正すべき点の対策を行う。また、部員が当番制で練習日誌を記録し、稽古内容や負傷者の有無及びその対応等、監督・コーチ等の指導者を含め、部の関係者が情報を共有することとする。

監督・コーチ等の指導者は、時代に即したスポーツ理論に基づいて最新の指導が出来るよう、外部の専門家などによる研修等への積極的参加を心掛け、それをその後の指導に活かして行く。また、本学道場では、コーチ陣やOB・OGにはナショナルチームで最先端のトレーニング・練習方法を学んでいるメンバーもあり、そうした知見・経験を組織的にフィードバックしていく。

本学空手道部は全寮制で、人間形成においてプラス面が大きいですが、それが故に空手道部以外の学生との交流が少なく、視野が狭くなりがちである。今後も引き続き、授業における一般学生との交流や、学内の他のクラブとの交流（リーダースキャンプ等）・他大学との交流などを積極的に増やしていく。

空手道部の昔から引き継がれた伝統的な規則を守っていく必要はあるが、これらが現代の部員の認識に合わなくなっている可能性もあるので、部員同士の話し合いを持ち検討する機会を設ける。

監督という立場で指導に当たる者は、空手道部内で絶対的な存在感を有していることを自覚し、学生との距離感や、押し付けとならないよう発言の仕方などに十分留意し指導に当たるよう心掛ける。また、その他の指導者であるコーチ等に関しても、同じく学生指導に関わるものとして、指導者研修の実施・外部研修への参加等心掛ける。

今後、空手道部の部員に対して、日常生活や進路等の悩み事について、空手道部内の指導者だけに相談するのではなく、学内の学生サポートセンター（なんでも相談コーナー）や、診療所（カウンセリングルーム）の存在や機能について周知し、だれでも利用できることをアナウンスし、部員が安心して報告・相談のできる、風通しの良い雰囲気をつくるよう考えていく。

本学のスポーツ医科学センターは、最先端のスポーツ医療分野の知見・スポーツ障害の予防と治療に高い設備・機能を備えており、体調管理・栄養管理のサポートも充実している。現状、空手道部では怪我の治療など、医療設備としての利用が中心となっているが、今後は定期的なメディカル・チェックやヒアリングの実施、更にはスポーツ関連疾患のスクリーニングや予防等能動的に活用できるよう調整していきたい。また、メンタル・トレーナーの配置が理想的ではあるが、少なくとも選手のコンディショニングをサポートするアスレチック・トレーナー配置の検討を提案する。栄養面に関しても、医科学センターの栄養士の協力を仰ぎ、部員の栄養に関してのサポートを行う。

空手道部を含む、強化クラブの部内で発生する類似案件の情報共有・情報交換を、各クラブの監督・コーチ等指導陣が参加する「監督者会議」等を開催し、対応策の横展開等を積極的に行うよう働きかけ、今後の空手道部の指導における改善に活かしていく。

以 上